淡路地区概論

小栗栖健治

一　淡路地区の概要

淡路島は『古事記』・『日本書紀』によると、日本列島において最初に創造された島であり、その伝承を伝える伊弉諾神宮が淡路市多賀に鎮座している。平安時代中期に成立した『延喜式』によれば、淡路国は南海道に属し、国の等級は下国とされた。津名郡と三原郡の二郡からなり、国衙・国分寺・国分尼寺、また、守護所は三原郡に置かれた。

江戸時代に入ると、慶長一五年（一六一〇）から同二〇年にかけては姫路城主の池田輝政と忠雄の所領となったが、慶長二〇年に起きた大坂夏の陣の功績により阿波国を得ていた蜂須賀至鎮に淡路国（岩屋を除く）が加増された。寛永三年に岩屋が加増され、幕末まで、蜂須賀家により支配された。淡路国が兵庫県の管轄になるのは、明治九年（一八七六）のことである。その後の自治体の変遷については詳述しないが、昭和四〇年（一九六五）以降、洲本市・津名郡（淡路町・北淡町・東浦町・一宮町・津名町・五色町）・三原郡（緑町・三原町・西淡町・南淡町の四町）の一市一〇町であったが、平成の合併により淡路市・洲本市・南あわじ市の三市となった。

淡路島の祭りや・行事の変容の画期となるのは大正期の生活改善、農業技術の改良であった。一九六〇年代に始まる高度経済成長による人口の流出、生活の近代化は伝統的な暮らしを大きく変容させた。平成七年（一九九五）年一月十七日、阪神淡路大震災が発生した。この頃まで、淡路島ではまだ伝統的な暮らしが受け継がれていたが、震災による伝統的な民家の倒壊等は昔ながらの暮らしを一変させた。また、平成十年（一九九八）四月五日の明石大橋の開通は、そうした状況に、より拍車を掛けることとなった。

震災前までは、旧東浦町域の年配の方に年中行事の聞き取りをすると、門松の松を採りに行くことを「若松を迎える」、裏白を採りに行くことを「正月さんを迎える」、このような話しを聞くことができていた。平成六年の渇水では「昔は神さんや仏さんを祀っていたが、今はしなくなった。神さんの罰が当たったんだろうか。今から祀っても許してくれへんやろな」、自分たちの代に昔ながらの年中行事をしなくなったことへの思いを話される年輩の方もおられた。阪神淡路大震災の頃は、高度経済成長の時期に故郷に残られた方々の世代交代の時期にあたっていたのである。

二　祭り・行事の特色

南あわじ市阿万の亀岡八幡神社に奉納される「阿万風流大踊小踊」は国の重要文化財、南あわじ市八木大久保に伝わる「大久保踊り」は兵庫県の文化財に指定されている。淡路島の神事・祭礼・風流はこれらをはじめとして多様であり、いくつかの項目に整理し概観しておきたい。

（一）風流踊り

淡路島の風流踊りは、「阿万風流大踊小踊」に代表される。この踊りは雨乞いの願解きに踊ったと『淡路草』（文政八年：一八二五）に記されている。大踊・小踊と称されるように、この踊りは、二つのグループからなる。大踊は、前踊子と大踊子、音頭がそれぞれ一二人、玉突き、太鼓、拍子木各一人によって構成される。小踊は、小踊子、音頭が一二人、拍子木、太鼓、笛、三味線・鐘が囃子によって構成される。大踊と小踊の構成を比較すると、小踊に三味線が入っていることから大踊を室町時代的、小踊を江戸時代的と考えられている。

南あわじ市の八木八幡神社に奉納される神踊りは風流踊りの系譜を伝える芸能である。また、同市榎列小榎列の府中八幡神社に奉納されるさ

さら踊りは、中世の祭礼芸能である田楽の要素を残存させた芸能として着目されている。

（二）ダンジリ

ダンジリは淡路島の祭礼においてひろく登場する。その濫觴については明らかにできないが、洲本城下の洲本八幡神社の祭礼において元禄三年（一六九〇）に登場したことを『堅磐草』は記している。城下町祭礼に登場した囃子屋台は花形としての人気を集め、淡路島内に流布したと推測される。ダンジリは多く春祭りと秋祭りに登場する。その形式は、舁きダンジリと、曳きダンジリに大別される。舁きダンジリには布団屋根、唐破風屋根、船形、屋根なし、曳きダンジリには唐破風二重屋根、切妻二重屋根、船形などがある。

淡路島のダンジリ祭礼では多くにダンジリ歌をともなう。とりわけ淡路人形浄瑠璃の本拠となった淡路島南部では「浄瑠璃くずし」とも称され、浄瑠璃の物語を取り込んだダンジリ歌が歌われる。洲本市五色町都志万歳の長林寺では七月に「つかいダンジリ」が奉納される。素朴な木組みのダンジリに二人の乗子が乗り、舁き手がダンジリを立てたり横にし、また、逆さまにしたり、一回転させる。淡路島の中にあって、とりわけ特色あるダンジリの風流である。

また、鳥飼八幡神社の秋季大祭には船ダンジリと太鼓ダンジリが登場し活況を呈するが、太鼓の総練りが行われる中、浜と岡の地区に分かれて大綱引きが行われる。大綱引きについて本報告書の鳥飼八幡神社の秋季大祭において報告している。

（三）エビス舞

淡路島での人形浄瑠璃の歴史は古く、職能的な集団によって各地において巡業・興行が行われた。それ故に人形浄瑠璃そのものはこの度の祭り・行事調査の対象には含まれていない。ただ、人形浄瑠璃の地元でもあり、神事に豊漁・豊作の祈願に人形が登場する。淡路市岩屋の石屋神社では三月に浜芝居があり、エビス舞が行われる。今は人が行っているが、かつてはエビスの人形が鯛を釣り上げていた。また、正月の十日えびすには、神社境内でエビス舞の興行が行われていた（淡路市仮屋　事代主神社）。

（四）粥占神事

年頭にあたり、その年の豊作を祈願する行事として、正月一五日に粥占神事が行われる。伊弉諾神宮（淡路市多賀）では釜で粥を炊き、この時、三本の竹筒を入れて炊きあげる。この竹筒は、早稲・中稲・晩稲を表す。神事に際して三宝に奉り、竹筒から伸びた粥の状況を見て、その年の豊作を予想する。こうした粥占神事は、厳島神社（洲本市本町四丁目）や石屋神社（淡路市岩屋）で行われ、『味地草』（安政四年：一八五七）は松帆神社（淡路市久留麻）で行われていたことを記している。

（五）御田植祭

栢の森住吉神社（洲本市内膳町）では四月に御田植祭が行われる。御田植祭は農作業の行程を模擬的に演じ豊作を祈念する。拝殿前に田に見立てた莚（むしろ）を敷き、莚一枚を田一反に見立てて行われる。苗は、長さ五十センチほどの桜の小枝である。早乙女（さおとめ）は三人一組で二組が登場し、六人は本殿に向かって並び、両手に桜の枝を持つ。宮司が太鼓を打ち出し田植歌を歌うと、早乙女は莚の上で苗（桜の枝）を植え付ける仕草をしながら、前へと進む。この御田植祭は『淡路国名所図絵』（嘉永四年：一八五一年）にも取り上げられている。当時と今とを比較すると、装束や早乙女役の年齢などに多少の異なりはあるが、当時の形式を現代によく伝えていることが分かる。なお、「淡路国風俗問状」に記された伊弉諾神宮（淡路市多賀）の御田植祭は一時中断されていたが、平成三年に御田植歌と御田植踊を復活している。

（六）座相撲

五穀の豊穣と結びついた奉納相撲は各地において行われている。淡路市舟木の岩上神社では座相撲（すわりずもう）が行われる。拝殿前に莚を敷き、行事は軍配である榊を持って座す。六人の氏子は東の「豊年」と西の「万作」の二組に分かれ、膝立ちで相撲を取る。この相撲は、行事が「東西、六勝六敗で今年も豊年万作」と結び終える。この神事相撲については、本報告書において報告している。

（七）社日

淡路島の村々には「シャニツァン」と通称される社日塔が建立されている。五角柱・六角柱の石造のものが多いが、木造のものもある。それぞれの面には大己貴大神・倉稲魂大神・天照皇大神・埴安姫大神・少彦名大神の神名が陰刻または墨書されている。社日の祭祀は春秋に行われるが、春は春分に近い戌の日、秋は秋分に近い戌の日とされている。祭りを行う意義は、春は五穀の豊穣、秋は収穫への感謝である。当日、村の当番は社日塔に注連縄を張り、鏡餅などの神饌を供えて参拝者を待つ。淡路市河内の社日は、割木一二本（閏年は一三本）で篝火を焚いていることからも分かるように、社日の祭祀は一年の豊かさと結びついていた。この社日塔は徳島藩の勧農政策により藩領に建立されたものとされ、社日塔が村々に祀られるようになるのは寛政元年（一七八九）以降のこととされている。淡路島の特色ある祭祀の一つと言えるものである。

これらの他にも獅子舞・的射・大名行列・宮座・盆踊りなど多様な祭り・行事の受け継がれていることを記しておきたい。

三　淡路島の正月行事

淡路島においてもっとも特色ある行事として、九日の節句と二十日の節句をあげることができる。九日の節句と二十日の節句は北淡路の山間の家々で行われる。九日の節句はジマツリとも称され、基本的に九日と一〇日にかけて行われる。また、二十日の節句は一九日から二〇日にかけて行われる。この二つの節句は、ともに玄関を入ったニワ（土間）に祀られるジンカミのところで行われる。祀り方や供物は家々により異なるので、概略を紹介する。

九日の節句はジノカミの下に、ハンギリにシロモチ、カスゴ、赤飯などを入れて供える。この日はジノミを作り供える。ジノミの形式は家々により異なるが、ミツガシワの葉にダンゴの粉を練ったものと御飯を乗せて藁で括る。これを束ねたシイの枝の中に入れ、藁で括る。この行為をミイレと呼んでいる。こうしてできあがったものが、ジノミである。このジノミを大きなシイの枝に付けたものが作られる。一年を表す十二を付けるところあるが、「稲が実ったようにシイノキにようけならす」と言われる。また、ミツガシワの葉と枝だけのジノミも作られる。大きなジノミはジノカミと種籾に奉り、ミツガシワのみのジノミはオトッサン（年神）やダイジンサン（伊勢神宮）に奉る。小さなジノミは、床の間や仏壇、玄関や背戸、牛小屋や納屋、門松、苗代などに奉る。このジノミを「花餅」と呼んでいる家もある。

九日の節句の日、村の寺社や堂では年頭にあたりその年の豊作を祈願する行事が行われる。牛玉杖が作られ、苗代田の水口に祀られる。ジノミ（花餅）と牛玉杖の役割に着目しておきたい。

二十日の節句は、一九日の夕方から始まる。この日の夕方、神さんが家々を訪れる。地の神さんのところに石臼を据え、その上に九日の節句と同様に供物を入れたハンギリを供える。石臼に蓑を寄せ、その上に笠を置く。二〇日の早朝、当主は蓑と笠を身にまとい、石臼に白粉餅と若水を入れて杵で搗く。これをツキアゲと呼び、この行事が終わると「早朝に百姓の神さんが働きに出る」と伝えられる。この神は働きに出たそ

の日から田で働き、穫り入れが終わった十月一九日に家に戻り二〇日に祭りを受ける。その後は、家で祀られる、また、山に帰ると伝える家がある。この神は「ヤマドッサン」とも伝承されている。二〇日の早朝、村では巨石や石の祠に祀られる荒神などに白粉のダンゴや甘酒を供えて廻る風習があり、「ムラガンマイリ」と称されている。二十日の節句に訪れる神は農耕の神・作神であり、田の神と山の神の去来を伝承する民俗事象であったが、阪神淡路大震災以後、伝統的な行事は行われなくなった。

南あわじ市倭文安住寺で行われる蛇祭りは山の神の祭りである。本報告書では沼島の山の神を取り上げている。

四　淡路国風俗問状答

淡路国には、「淡路国風俗問状答」が残されている。風俗問状は江戸幕府の国学者屋代弘賢が全国的な地域偏差を明らかにしようと年中行事や風俗習慣の項目を策定して質問書を作り、全国の諸藩に発したものである。『淡路古今紀聞』（明治一七年：一八八四）によれば、それは文化一五年（一八一八）のことであったとされ、その答書（「淡路国風俗問状答書」）は『淡路草』（文政八年：一八二五）に収録されている。津名郡来馬組の組頭庄屋（大庄屋）を務めた正井家の文書には、関連文書として①「諸国風俗問状」、②「津名郡来馬組諸国風俗問状御答書」（文化十五年）、③「諸国風俗問状御答帳」（文化一五年）の三点が含まれている。これらの文書から淡路島での風俗問状の編纂は、組頭庄屋の支配地域を基本として行われたことが分かる。

②「津名郡来馬組諸国風俗問状御答書」が、来馬組の一三か村浦についての答書であることからも明らかなように、淡路一国の答書として整理される前の答書である。「屠蘇の事」を例に、内容を比較しておきたい。

・「諸国風俗問状」①

年少の者より飲はしめ候歟、第二は尊長の人飲候歟、猶年の次第により　若き人よりのミ候哉、

・「津名郡来馬組諸国風俗問状御答書」②

屠蘇は、医家并勝手相応之者は相用候得とも、多分は用不レ申候。

・「淡路国風俗問状答書」

或は年少より飲初め、或は尊長より飲初む。年少より初め、第二又尊長の人飲、夫より年の次第をもて若き人に及ぼすもあり。

比較してみると、「淡路国風俗問状答書」の内容は「諸国風俗問状」に対応するように体裁を整え記しているが、「津名郡来馬組諸国風俗問状御答書」は医者と分相応の者はするが多くの者はしていないと、地域社会の現状を記している。この他にも、元日の門松は「家々風儀」により異なること、歳徳の神棚は「家々ニ而少々宛之違」いがあることなど、年中行事のあり方が、村内一様でないことを示していて興味深い。

以上、淡路島の祭り・行事について概観した。淡路島は、北部地域は平野部が少なく山間部が多い。それに対して南部地域は島とは思えないほどに大きく平野が広がる。生業の厳しさは祭りや行事のあり様にも影響を与えていたようである。淡路島の祭り・行事を風流という視点で捉えると、南部地域は「阿万風流大踊小踊」をはじめとしてささら踊り、神踊りなど風流踊りが多く伝承されていることである。風流踊りの少ない北部地域は、農耕にともなう祭り・行事が重きを占めている。こうした傾向は一概に言えることではないが、耕地面積の狭小、集村と散村、政治文化の拠点が南部に置かれたことなど、地域の環境に起因するように思えることである。

石上神社秋季例祭奉納　座相撲

海部　伸雄

一　舟木村と石上神社の概要

（一）舟木村について

正保国絵図（一六四六・蜂須賀家文書）に村名が見え、高四八石余とある。戸数・人数は文化七年（一八一〇）三三戸（「棟付人数改帳」舟木町内会蔵）、安政五年（一八五八）二八戸・一七八人（『銘細郡村仮名帖抄録版』北山學編著）、平成三〇年三〇戸・六四人と戸数は大きな変動も無く推移してきたが、人口は減少著しい。江戸時代は上山村の支邑とされ、上山村庄屋が舟木村庄屋も兼帯した。津名丘陵西浦側、播磨灘を望む標高一〇〇メートルから一七〇メートルに人家が散在する山間部の小村である。

（二）舟木集落の民俗行事

舟木集落の民俗行事	
1月11日	初講
1月27日	観音開き
3月10日	石上神社春祭
4月11日	大般若経転読
4月18日	天のんさんの祭
7月11日	虫送り
7月21日	回りご祈祷
7月22日	山の神の祭
8月15日	施餓鬼会
8月23日	地蔵盆
10月9日	石上神社秋祭・座相撲
12月18日	荒神祭

集落内の道沿いには石仏（不動尊・地蔵尊）が多く祀られ、現在も隣保毎に当番を決めて花を欠かさないなど信仰心も根強い。

集落の年中行事は一月の「初講」に始まり十二月の「荒神祭」に終わるが、本報告の「座相撲」もその内の一つである。

（三）石上神社について

弥生時代後期の鍛冶工房とみられる建物跡や多数の鉄製品、後漢鏡の一部などが発見された舟木遺跡の中心部付近に石上神社がある。高さ二、五メートル、幅二、八メートルの巨石を磐座として祀り、その周辺からは弥生時代の大型器台型土器も見つかっており、古くから周辺に住む人々の信仰の対象であったことを想像させる。

江戸時代に書かれた地誌「味地草」（安政四年・一八五七）の舟木村の項には「岩神　棚原池の上にあり　神境の畝数二畝、租税免除す　例祭正九両月各九日を用ゆ　境地に荒神小祠あり　一一月十日祭祀す　別当福萬真泉両刹司る」とある。境内にある荒神の祭（一二月一八日）には、小山の頂きにある磐座の周囲に巡らせた注連縄を毎年新しく張り替えるが、準備する注連縄の全長は一八〇尋である。

「荒神祭」の当番二人が、毎月一日にそれぞれ手分けをして石上神社と山の神に参って洗米と御神酒を供えており、祀りを欠かさない。

また、注連縄を張った神域は現在も女人禁制であり、石上神社が舟木の人々にとって特別な信仰空間として伝わってきたことを表わしている。

二　実施期間・実施場所

石上神社の秋季例祭は毎年一〇月九日に行われる。「味地草」に書かれているように江戸時代は旧暦九月九日で行われてきたので、新暦では一ヶ月ずらして一〇月にしたのであろう。御神体（磐座）前の拝殿で神事を行った後、拝殿前の広場で「座相撲」が行われる。

三　歴史と概要

舟木の人は、石上神社の春・秋の祭を「むらぎとう（村祈祷）」と呼ぶ。春の村祈祷は田植え前に行い、神事を行うことで稲の順調な生育を祈る。秋の村祈祷は神事と「座相撲」で豊年万作を祈るという。七月一一日に石上神社で行う神事と「虫送り」の行事も、稲作に関わる一連の村祈祷行事であろう。

石上神社祭の最も古い記録は先述した安政四年の「味地草」の記述である。「座相撲」についての記述はないが、村の生業の根幹を占める稲作の順調な生育と豊かな実りを祈って春の例祭（村祈祷）・夏の虫送りとともに、秋の例祭で座相撲も行われていたのではないかと思われる。

「荒神祭」には、嘉永三年（一八五〇）から当番が持ち伝えてきた「荒神祭村祭リ造用帳」が残り、江戸時代後期には舟木集落で現在行われている民俗行事の形がすでにできあがっていたのであろう。

写真１　神社秋季例祭

四　組織

江戸時代には蟇浦村真泉寺・上山村福萬寺の住職が司っていたが、明治以降は神官が祭事を執り行い、現在は野島（旧蟇浦村）神官が司っている。

地域内の組織は、当番が三人で、その内の一人は「若中（わかなか）」の役員である。町内会の副会長が「使丁（しきじ）」を務め、当番とともに準備を行い、当日は進行役も兼ねる。

五　祭り・行事の内容（二〇一八年一〇月九日）

午前七時四〇分に町内会長、使丁、当番三人が、石上神社に到着し準備を始めた。幟を立てたり、供物を供えたり、鳥居の注連縄を張り替えたりする内に、神主と参列者六人が到着し八時四〇分から祭礼が始まった。神主の祝詞が奏上され、鳥居周辺への塩まき、祝詞、玉串奉奠と進み、その後筵を敷いて塩で清めたあと九時五分から座相撲が行われた。

六　基本の所作

拝殿前に敷かれた筵の上で、東の「豊年」と西の「万作」に分かれた氏子が行司のかけ声で膝立ちの姿勢で相撲をとる。

年配者が榊の小枝を持ち行司を務める。東西に分かれた氏子が、一人ずつ筵の上に正座する。行司の「東が勝てば豊年、西が勝てば万作。さあ見合って、はけよい。」のかけ声で膝立ちのまま組み合う。一組が四番勝負で交互に勝って二勝二敗で終わる。引き分けで勝負が終わると、取り組んだ二人の手のひらに榊の葉で「シロモチ（米粉を水で練ったもの）」をのせて食べさせる。二組目、三組目と四番

勝負を繰り返し、それぞれ引き分けで終わった後「シロモチ」を食べる。

三組目の「シロモチ」が食べ終わった後、行司が両者に「日の丸の扇子」を渡して広げさせ、「東西、六勝六敗で今年も豊年万作」と宣言して「座相撲」は終わる。その後舟木会館で直会が行われる。

写真２　石上神社秋季例祭　座相撲

七　参考文献

上椙英之　二〇一四「座り相撲（淡路市）石上神社」
（『平成二五年度文化遺産を活かした地域活性化事業報告書
淡路島の民俗芸能Ⅱ―風流―』）

北淡町　一九七五『北淡町誌』

安曇弘泰　一九九一「生活支える素朴な農民信仰―
北淡町　黒谷・長畠・舟木の調査報告」
淡路地方史研究会会誌『あわじ』八号

鳥飼八幡神社秋季大祭

籔　元晶

一　名称

鳥飼八幡神社秋季大祭

二　実施期間・実施場所

（一）祭りの期日は、本宮が一〇月の第三日曜日で、宵宮が前日の土曜日になる。以前は、本宮の翌日の月曜日に子ども相撲を行っていたが、五年ほど前になくなったとのことである。

（二）祭りの場所は、鳥飼八幡神社境内と神輿の渡御先となる五色浜の恵比寿神社である。

三　特色

（一）神社の神事（神輿・大綱引き）と各組が行うネリモノ（太鼓ネリ・ダンジリ）とが、意識の上ではっきりと分けられている点が注目される。そのことから、人数の減少でネリモノができなくなった角川南組も神事には今も参加している。以前は、三日目の子ども相撲も神事として行われていた。

（二）祭礼の特色としては、神輿を本厄の男性が担ぐことを基本にしていることと、御旅所の浜で神輿ごと海に飛び込むところが注目される。また、本宮の最後に行われる大綱引きは、浜の大漁と岡の豊作を占う神事として執り行われている。

（三）ネリモノが盛んで、どの組も太鼓ネリとダンジリの二つを行っている。浜は船ダンジリ、岡は布団ダンジリと、二種類のダンジリが見られるのが特色である。

四　歴史と概要

（一）現在は十月の第三日曜が本宮であるが、以前は一〇月一五日であった。『淡路国名所図絵』によると、八月十五日に例祭があり、「八月祭礼神輿還御の後拝殿の前に於て綱曳あり…此綱曳終りて小童二人二番勝負の神事角力を興す」とあるので、現在行われている神輿の渡御や大綱引き、それに最近まで行われていた子ども相撲は、近世においては旧暦八月十五日に行われていたことがわかる。

五　組織

（一）鳥飼八幡神社の氏子は、鳥飼上・中・南・浜・北・角川（つのかわ）南の六地区である。地区のことを、普通には「組」と呼んでいる。各組から宮総代が一人ずつ出て、六人の宮総代でお宮の世話をしている。お宮がある中組の宮総代が総代長を勤めることになっている。月次祭が毎月一日と一五日に行われている。一〇年ほど前に鳥飼八幡の神主さんが亡くなられたので、今は伊弉諾神宮の神主さんに来ていただいている。

（二）神輿の世話をする人をネギ衆という。各組から四人ずつ合計二四人の人が選ばれる。厄年をすませた五〇代から六〇代の人がなっている。その年の当番支部のネギが天狗・奉行・扇子（マネキと呼んでいる）を勤める。マネキは扇子で神輿を招きながら道案内をする役である。ほかに、松や太鼓がある。以前は旗や鉾なども持って歩いたが、いたんできたので今はしていない。神輿を担

ぐのは、祭礼団から選ばれた厄年の人が中心であるが、ネギもそれを補助している。

『淡路島の民俗』によると、「祢宜役は昭和一八年までは家が固定していたが、以後は順廻りとなった。祢宜役の一七戸はかつて加藤嘉明の配下にあった家々だと伝えられている。」とのことで、大きく変遷してきているようである

(三) 各組の祭礼団は、昔は四〇人ほどいたが、今は二〇人ほどである。それぞれの組を「〇組祭礼団」と言っているが、中組だけは「當若祭礼団」と言う。中組が鳥飼八幡神社が位置する地区に当たっていることによるものかと思われる。他の地区も「〇若」と呼ぶ言い方が残っているようで、車に「上若祭礼団」や「北若祭礼団」のステッカーが貼られていた。また、神輿の渡御に随行する大きな幟には、それぞれ「南若」「濱若」「當若」などと刺繍されている。角川南組は今は幟を出していないが、「角若」とあったように思うとのことである。各組の提灯にも「〇若」とある。「若」は「若衆」のことではないかとのことである。祭礼団の役員は支部長・副支部長・練物係二人の四人である。太鼓の練習は一週間前から、各地区の集会所で行う。七時から一二時ぐらいである。祭礼団の衣装は、組ごとにそれぞれ違う。

北組…黒のハッピで背中に軍配の絵、ハチマキの色は黄色。
浜組…黒のハッピで背中にホラ貝の絵、ハチマキの色は青。
南組…白のジバンに背中に好きな字や絵、ハチマキの色はピンク。
當若…白のジバンに背中に好きな字や絵、ハチマキの色はピンク。
上組…白のジバンに背中に好きな字や絵、ハチマキの色は青。

ちなみに角川南組が参加していた時は、ハチマキは黄色であった。

六　祭り・行事の内容

(一) 宵宮

今年(二〇一九年)の宵宮については、予定表では次のようであった。

・元綱祓い　午前八時
※神輿飾り付　午後一時
・祭典　午後四時三〇分
・練り開始　午後五時三〇分
・獅子舞

午前中から昼過ぎにかけて祭の準備をする。男の人だけでしている。

①大綱を作る。

一週間ほど前の大安の日にモトツナ(元綱)を作る。今年は十三日が大安だったので、その日に作った。モトツナは大綱のよりをかける最初のところである。そして、そこから芯になる綱を三本なって同じ長さにする。シンワラ(芯藁)と言って、長い藁を使う。これまではモチワラ(糯藁)を使っていて、六地区でそれ用に作ってもらっていたが、今年は酒米を作っているところからもらったとのことである。大綱は宵宮の日の朝八時ぐらいから作り始めて、できあがるのは一時か二時頃である。作り始める前に、拝殿で神主さんにお祓いをしてもらってから作り始める。各組で男の人が十人以上集まり、総員七〇人ほどで作る。拝殿の前にモトツナを置いて、そこから下手に三本の芯になる縄が伸びているが、今年は拝殿から見て左手の綱に角川南組・中組、真ん中の綱に上組・南組、右手の綱に北組・浜組がそれぞれ担当していた。まず、芯の縄に藁をさして太くしていく。その藁は、キヌヒカリやコシヒカリを使っている。その藁は、各組がそれぞれ軽四一台に藁をいっぱい積んで持ち寄る。

そして、太くなった縄三本をそれぞれ転がして回転させながら、モトツナに棒を差し込んでなっていく。全部なえると、中心を縄でくくり、そこに担当支部長が大綱に乗る時につかまるための綱を付けておく。大綱を強くするために海苔網で巻くと聞いていたが、今年は中心から両側に一ｍ間隔に大綱を縄でしばっていき、綱の両横にも縄を通して結んでいた。大綱の長さは一八ｍ七〇㎝で、これは拝殿の端から端までの長さであるという。太さは二ひろ強の太さになる。できあがった大綱は、全員で拝殿の下にしまっておく。

②神輿の準備

ネギ衆によって、神輿が神輿小屋から出され、飾り付けが行われる。社務所の前で、大人神輿と子ども神輿の二つが用意される。

③ダンジリの準備

大綱を作っている横で、各組でダンジリの準備をしている。境内にあるダンジリ小屋からダンジリを出して、組み立てて飾り付けをし、境内に設置する。これも男の人だけで準備をしている。浜組と北組は船（ふな）ダンジリで、上組と南組と當若は布団ダンジリである。船ダンジリは台車の上の前後に大きな藁を束ねたものを置いてそれがクッションになるように、その上に船を乗せている。船と藁束と台車を綱でしっかりとくくりつけることが大切である。船唄の時に激しく船をゆするからである。藁束はへたってくると、新しい物に取り替える。そして、幕や旗などの飾り付けもする。布団ダンジリは、棒や布団の部分もすべてばらしてダンジリ小屋にしまっているので、まずそれらを組み立ててから飾り付けをする。太鼓は、ダンジリの下をななめに倒して、下から入れて縦に置き四隅で吊す。それを四人の子どもが四方から叩くことになる。布団のワクが五段あり、それに布団をつける。一番上に井桁状のものを乗せる。そして、飾り付けをする。なお、ダンジリの片付けは月曜日にする。布団もはずして、一段ずつ片付ける。

④太鼓ネリ

五時くらいに馬場先に集まる。入る順番は毎年異なるが、今年は、南組（今年の当番支部）・北組・當若（中組）・上組・浜組の順であった。一本の太い棒に大きな太鼓をくくりつけて一〇人ほどで担ぎ、太鼓を四人で打ちながら練る。一の鳥居から入り、二の鳥居

写真１　大綱作り

写真２　神輿の準備

写真３　船ダンジリの準備

写真４　布団ダンジリの準備

写真５　太鼓ネリ

までの参道を太鼓の上に人を一人乗せたり二人乗せたりしながら「オーサジャ。オーサジャ。」と言いながら何度も練る。太鼓の上に乗った人は、ジバンをぬいで手に持ち「オーサジャ」と叫ぶたびにそれを振り上げる。時には、太鼓を上下反対に棒の上に乗せるようにして担ぎ、その上に人が乗ったりもする。それが終わると二の鳥居の前でギオンバヤシをする。一〇分ほどである。ギオンバヤシが終わると、練物係の二人が提灯を持って一の鳥居の前で待つ次の組に挨拶に行く。そして、次の組の太鼓練りが始まる。最初の太鼓ネリは、石段を登って二の鳥居を過ぎ、そこから楼門までの階段を上ったり下りたりする。二組の太鼓練りが二の鳥居をはさんで上と下でそれぞれに行われる状況となる。しばらく練った後、初めの組は、二の鳥居をくぐった所の広くなったところでギオンバヤシをする。次の組も、二の鳥居の手前でギオンバヤシをする。それが終わると、初めの組は階段を練りながら、楼門を越えて境内に入り、拝殿前まで行く。そして、拝殿までの参道を何度も行き帰して練り、拝殿前で参拝をして、ギオンバヤシを唄う。こうして、一組目がようやく終わり、これが順番に五組続いていく。

（二）本宮

今年の本宮については、予定表では次のようになっていた。

・祭典　午前一〇時
・厄除者餅まき　午前一〇時四五分
・若宮神輿出発　午前一一時
・船だんじり出発　午前一一時三〇分

※続いて布団だんじり出発

・恵比寿神社祭典　午後二時
・獅子舞　午後二時三〇分
・船だんじり出発（帰路）　午後三時
・獅子舞　（拝殿前）　午後四時三〇分
・神輿宮入り　午後五時　※続いて還幸祭
・船だんじり宮入　※船歌奉納　午後七時
・総練り　午後八時
・綱引き　午後八時三〇分

①まず、拝殿において祭礼が行われ、それに続いて本厄の男の人による餅まきがある。紅白の小餅やお菓子がたくさんまかれる。

②神輿の渡御

元々は本厄の男の人だけで担いでいたが、今はそれだけでは人数が足りないのでネギ衆も加わって神輿を担いでいる。神輿を担ぐ人は全員白いハカマを着ている。足元も白いタビや白い靴である。子ども神輿が先に出る。子ども神輿を曳くのは、鳥飼小学校の六年生の子ども達で、男女とも参加している。大人の神輿は、担いで階段を下りて行く。当日、神輿が出たのは、一二時を過ぎていた。そして、神輿は接待の場所など何カ所かに寄りながら浜の御旅所のエベッサンまで行く。「サー、サー、イヤサカサー。」と唱えながら行く。

昔は、神輿は川に入りたいのだといって、川の中を神輿が行っていたということである。川が道のようになっていたという。以前は馬場先の所から鳥飼川へ下りる道があり、そこを神輿が行ったという。神輿の後を船ダンジリが二つ続いて川を行き、布団ダンジリは川沿いの道を行ったということである。船ダンジリが川の中を行く様子を写した写真が社務所に残されているが、今の人でそれを実際に見た人はなく、百年以上前のことではないかとのことである。昔は御旅所

の恵比寿神社の前は広い砂浜が続いていたので、神輿は川を下って砂浜から御旅所へと行ったということである。

③ダンジリの宮だし

ダンジリが出る順番は年によって変わるが、いつも船ダンジリが布団ダンジリよりも先である。今年は、浜組・北組・南組・當若・上組の順に出た。

一番目の浜組の船ダンジリが引き出されて、拝殿の前に横付けするような形ですえられる。船の上には若者が一〇人ほどフンドシ姿になって並ぶ。全員で参拝をしてから、船唄を奉納する。船の前に太鼓を置き、太鼓に合わせて船唄を歌う。船唄は、一から十までの数え歌になっている。唄の合間に船の上の若者が船縁をつかんで船を激しくゆする。時には、台車の車輪が浮くほどである。船唄を奉納すると、楼門より出て階段を降りて行く。この時、「オーサジャ。オーサジャ。」を繰り返し叫ぶ。階段の初めと二の門の手前の階段に板を何枚か並べて階段を勢いよく降りて行く。二の門の手前の広場まで降りると、二の門下の数段の階段に、上で使った板を並べる。そして、ここも滑らせて降りる。次に、二の門下の所から、一気に走るように一の門を出て左に大きく曲がって道に出て行く。降りる時は、船の後ろから長い綱を出し、それを他の組の人も大勢手伝って曳いている。船の前からも長い綱を出して、前からも引っ張っている。次の北組の船ダンジリも、同じように船唄を奉納して石段を降りて行く。

写真７　船ダンジリの宮だし

写真６　神輿の渡御

南組から後は布団ダンジリである。布団ダンジリの乗り子は四人で、小学校二年生から五年生の男の子が太鼓を叩く。乗り子の太鼓や唄に掛け合うように担ぎ手が唄を歌う。拝殿の前の参道を行ったり来たり何度もしてから参拝する。そして、南組と上組のダンジリは鳥居が通れないので、坂道を下りてから一の鳥居と二の鳥居の間を練り、二の鳥居の手前まで上がってダンジリをゆすったりを二度ほどする。そして、一の鳥居から出ていく。當若のダンジリは二の鳥居を通れるので、楼門の階段をかついで下りて行く。

④御旅所祭。今年は二時半過ぎに、五色浜のエベッサンで御旅所祭が行われた。各組の幟を立て、鳥居の前に神輿と子ども神輿をすえる。神職による祭典があり、神楽が奉納された。祭典の後、横の広場で、當若による獅子舞が奉納される。當若だけ獅子舞がある。その後、五色町漁業協同組合がある漁港まで行き、神輿ごと海へ飛び込む。漁港の所がコンクリートの斜面になっているので、神輿を台車に乗せたままロープで斜面の上の方まで引っ張り上げ、本厄の人達が神輿を担ぐ棒の上に全員乗って、勢いよく斜面を下って行きそのまま神輿ごと海に突っ込む。それを三度ほど繰り返していた。多くの見物客が集まっていた。

⑤神輿がお宮に戻ってくると、還幸祭が行われる。その後、神輿は神輿小屋へ片付けられる。

⑥ダンジリの宮入。夕方、ダンジリの宮入りがある。出た順番に入る。

当番支部の支部長・副支部長・練物係二人が一の門の所で待つ浜組祭礼団の役員に挨拶にいき、ダンジリの宮入りが始まる。この日は六時過ぎであった。船ダンジリが下りた時と同じように、長い綱で引っ張りながら階段に板を敷いて上っていく。この時も、さかんに「オーサジャ。オーサジャ。」のかけ声をかけながら、時間をかけて上っていく。そして、境内に入ると、拝殿まで進んでまた横付けし船唄を奉納する。船唄が終わると、すぐに練物係の二人が提灯を持って走り、一の鳥居まで行き、鳥居前で待つ北組の支部長・副支部長・練物係二人に挨拶をする。それから北組の宮入が始まる。この日は七時ごろであった。浜組と同じようにして上がり拝殿前で船唄を行った。そして、次の南組の宮入が始まったのは七時半頃であった。南組のダンジリは、大きすぎて二の鳥居をくぐれないので、二の鳥居の寸前まで上げて、そこでゆする。そしてまた一の鳥居までもどってもう一度二の鳥居まで行く。そして、横の坂を上って境内へと上がる。ここでも、拝殿と楼門の間を行き来してから参拝する。その後も、何度も行き来を繰り返す。参道の真ん中あたりで全員で肩を入れて担いでゆすったりもする。この間、中の太鼓の子どもと掛け合いで唄を歌う。當若のダンジリも一の鳥居と二の鳥居の間を三度ほど行き来する。當若のダンジリは二の鳥居をぎりぎり通れるので、担いだまま階段を上がる。そして、楼門をくぐってそのまま担いで拝殿まで行く。また楼門までもどって拝殿まで行くを三、四回繰り返す。真ん中あたりでゆすったりもする。最後に拝殿で参拝する。参拝が終わると、練物係の二人が提灯を持って一の鳥居まで行き、上組祭礼団に連絡する。それを聞いて、上組は「上組祭礼団つつしんでお受けします。」と言う。上組のダンジリは大きくて二の鳥居をくぐれないので、南組のダンジリと同じように、一の鳥居と二の鳥居の間を何度か練り、二の鳥居の寸前でゆするを何度かする。その後坂に回って境内に上がる。そして、また拝殿と楼門の間を何度も行き来した後に参拝する。

だいたい一組のダンジリが宮入りするのに三十分ほどであった。以前は鳥居さんに当てたりしながら入るので、一つが入るのに四十分ほどかかっていたようである。ダンジリの宮入りは八時半から九時頃に終わる予定だが、一時間ほど遅れることもあったという。こうして、すべての宮入りが終わると、境内のダンジリを小屋に片付ける。

⑦太鼓の総練り。ダンジリが終わると、太鼓の総練りになる。当番支部が拝殿の賽銭箱を片付けるなどの準備をする。拝殿の階段を下りて五ｍ程の所に巻き尺の端を置いて、等距離になるように各組の太鼓の

写真８　御旅所祭

写真９　神輿とともに海へ

写真10　船唄

写真11　布団ダンジリの宮入

棒の先端を置く。そして、当番支部長が提灯を上げると、一斉に六つの地区の太鼓が競い合って拝殿に登ろうとしてひしめきあう。ネリ一五人ほどで、どの太鼓にも若者が一人乗り「オーサジャ。オーサジャ。」の叫び声をあげている。一番先に上がった組は拝殿の中でも走り回りながら「オーサジャ。」を繰り返す。階段の所でひしめき合っていた組も少しずつ拝殿に上がり、すべての組が上がると、一番に上がった太鼓が下りてくる。その他の太鼓も下りてくるが、その後も境内で「オーサジャ。オーサジャ。」の熱狂が続く。

⑧大綱引き。太鼓の総練りの熱狂がまだ続く中、当番支部が大綱を準備する。拝殿の下にしまっていた大綱を出してきて、拝殿の前の参道の真ん中に大綱の中心を置いて、拝殿に平行になるように綱を置く。浜（北組・浜組）と岡（上組・中組・南組・角川南組）の男の人だけで引き合う。拝殿にから見て左手に岡、右手に浜になるように並ぶ。そして、綱の中心部に当番支部長が乗る。綱の中心には細い綱が結びつけてあり、当番支部長はそれをつかんで大綱に乗り、乗ったまま引かれる。勝負は一回勝負で、当番支部長が提灯を上げたら、勝負あったである。綱の中心が参道の石畳を超えたら勝負が決まる。今年は、岡が勝ったので豊作である。

写真12　太鼓の総ネリ

写真13　大綱引き

（三）次の日

本宮の次の日は、ダンジリの片付けが行われる。昔はこの日に宮相撲を行っていた。土俵を作って、小学校六年ぐらいの男の子がしていた。出たい子がしていたという。

七　参考文献

碧湛著　一九七七『淡国通記』名著出版元禄一〇年（一六九七）成立

仲野安雄著　一九七四『淡路常磐草』名著出版
享保十五年（一七三〇）成立

藤井容信・藤井彰民編　一九七五『淡路草』名著出版
文政八年（一八二五）成立

渡部月石編『堅磐草』　一九七一年名著出版
天保三年（一八三二）成立

暁鐘成編一九七二『淡路国名所図絵』福浦藻文堂
嘉永四年（一八五一）成立

小西友直・小西錦江編　一九七二『味地草』名著出版
安政四年（一八五七）成立

和歌森太郎編　一九六四『淡路島の民俗』吉川弘文館

濱岡きみ子編著、五色町住民福祉課　一九八三『五色町民俗誌』
船唄が採録されている。

兵庫県神職会編　一九八四『兵庫県神社誌』下巻　臨川書店

神戸新聞淡路総局一九八三『淡路祭事記３６５日』
神戸新聞出版センター

沼島の山の神

堀部　るみ子

一　名称

山の神

二　実施期間・実施場所

一月の第二土曜日（もとは旧暦の一月十五日。その後、第二日曜日になり現在は漁の休みの土曜日に）

南あわじ市沼島　山ノ大神社

三　特色

農民が信仰する山の神は、春に山から里に下って田の神になり、秋の収穫がすむと山に帰って山の神となるが、沼島の山の神は「鉄王稲荷大明神」と呼ばれている。

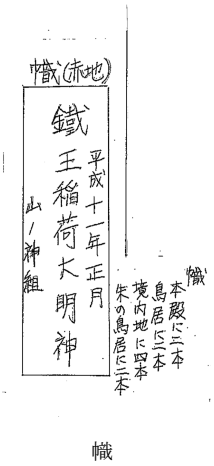
四　歴史と概要

昔のことは不明。山の神組の頭屋が神主の役目をしていたが、現在は沼島八幡神社の宮司が拝む。

五　組織

山の神組。役員は会長と会計。

五〇年くらい前は六〇軒であったが、今は一八軒



六　祭り・行事の内容（衣装・付属する行事等）

山の神が祀られている別名、火立山にて祭事を行う。参道には朱の鳥居が林立。本殿に「山之大神」の祠と稲荷の社・狐を祀る。

山の神へは登山道と車道がある。世話人が車で供物・餅・直会の料理などを運ぶ。一〇時頃から準備にとりかかる。供物は御神酒・掛けの魚（沼島では干した魚を使う。赤い魚を好むとされ、鯛・ほうぼう・おこぜなどを二尾合わせる）・赤飯・油揚げ・季節の野菜と果物・餅まき用の餅・三方に塩などである。

一一時から神事があり、修祓、降神の儀、献饌、祝詞奏上、御鈴拝戴、撤饌、昇神の儀が終わると、餅まきをする。

餅まきはけん餅という紅白の餅一〇個（角餅という四方にほおり投げる大きな餅を指す）と天餅（漁協の組合長と世話人の代表が社と鳥居の間に立ち、後ろ向きに鳥居を越すように投げる）と小餅をま

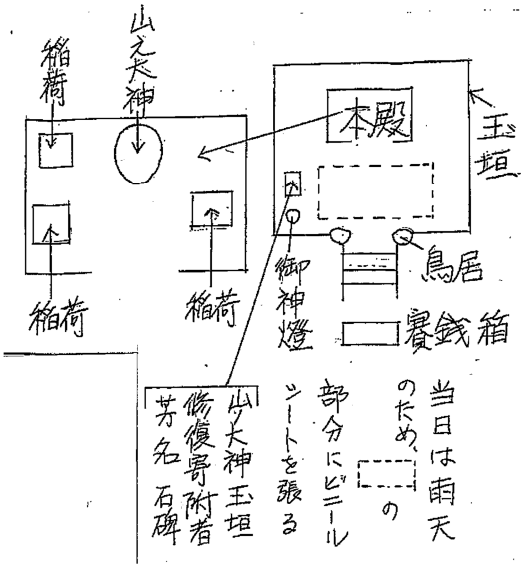
写真１　供物　掛けの魚・油揚げ・赤飯

写真２　神事　１

く。全ての行事が終わると直会にうつる。なお、山の神は、以前は穴神さんと言われ洞穴で祀られていた。

写真３　御鈴拝戴

写真４　神事　２



配置図

七　参考文献

『日本民俗大辞典』　二〇〇一吉川弘文館